子供と共に感じ
共に主体者となって遊びこむ

南房総市立千倉幼稚園園長　鈴木（すずき）　恵美子（えみこ）

1　はじめに

千倉幼稚園は、海と山に囲まれた温暖な気候に立地しており、活発な子供たちも多く、登園して来るとすぐにドッジボールやダンスが始まる。一年を通して、活動にストーリー性をもたせ、昨年度から「絵本のぞう」の世界に入り込み、ぞうの友達探しから、運動会ごっこやおたのしみ会（遊戯会）づくりへ繋げていっている。

2　子供のワクワク感を感じて

６月には近くのお寺へ紫陽花を見に行った時、ぞうの友達の持ち物「黄色い帽子と赤いポシェット」を、７月には神社へ七夕飾りを見に行き「布団と枕」を、８月には海へと出かけ「砂場セット」を見つけるなど、ぞうの友達を探すヒントになる物を子供自身が発見し、ワクワクドキドキする気持ちでいっぱいになる。そこには、子供の想像をかき立てる教師のちょっとした仕掛けもあるが。

運動会ごっこづくりでは、ぞうから「友達は遊園地が好きだよ。」と聞くと、「みんなで遊園地を作ったら、友達が来てくれるかも。」と友達と一緒に考え始め、お菓子のチュロスをモチーフにした「チュロス運び」（台風の目）、お化け屋敷を取り入れた障害物リレー「遊園地でかけっこ」など、さまざまな遊園地遊びをイメージした種目で遊び始めた。活動を続けるうち、子供の祖父が遊びに必要な段ボール箱を届けてくれるなど、家庭も巻き込んで遊びを展開させてきた。

運動会ごっこ当日、ぞうとその友達が園舎から見ている姿を発見した子供たちは、大喜び！ ワクワクする思いを、子供たち自身が活動の中で感じた瞬間だ。行事としての運動会のために練習するのではなく、毎日の遊園地遊びを運動会ごっことして保護者に見てもらう。運動会ごっこも普段の遊びの続きなのだ。

５月、子供たちがスイカを育てたいと苗を植えた。しかし、目的のスイカは一つも採れず、子供たちはがっかりだ。ところがそこにできたのが薄黄緑色の細長いもの。「これは何？ スイカ？」と図鑑を見たり、家族に聞いたりして調べ始めると、「ふくべ」夕顔の実ということがわかる。食べられると聞いた子供たちは、幼稚園の栄養士に食べ方を聞く。早速ピーラーで皮をむいて干し、干し上がった干瓢を海苔巻きで食べた。子供の何だろう？ という探求心を教師が受け止め、最後まで付き合う。そうした丁寧な関わりが、今の教育にはとても大切なのだと思う。

今の教育には、応答的な関わりがとても大切と言われている。子供自身がワクワクする気持ちを教師も共に感じ、どうしたら実現できるのだろうと一緒に考え、遊びを楽しむことで、子供たちが何に興味をもち、どんな遊びをしたいのかを理解できる。答えを示すのではなく、一人一人をじっくりと観察し、共に活動していくことから始まるのではないか。

一人一人が心を動かされる体験がもてているのか、昨日の遊びから今日はどんな遊びが予想され、そこにどんな思いで関わっていきたいのか、週末にマップ型保育記録を書き込みながら話し合い、教師同士が共有し、同じ方向で関わっていくことを大切にしている。